

教育研究業績書

2018年11月08日

所属：看護学科

資格：助教（臨床）

氏名：谷口 千夏

研究分野	研究内容のキーワード
基礎看護学、成人看護学	外来看護、セルフモニタリング、慢性心不全看護
学位	最終学歴
修士（看護学）	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程修了

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1. 看護師国家試験勉強のサポート	2017年5月～現在	国家試験対策担当として、学生の国家試験勉強の目標設定や勉強方法について指導したり、進捗状況を確認することによって、国家試験合格に向けてのサポートを行っている。
2. CJC100 循環器編	2017年11月	国家試験対策として行っているCJC100というランチセミナーの循環器編を担当した。解剖生理を中心に、作成した資料を用いて解説を行った。学生が発言しやすいような雰囲気作りと、その場で理解できるよう進化した。
3. 看護技術習得のための学生による自己練習のサポート	2016年4月～現在	学生が看護技術を習得していくためには、授業時間外の自己練習が不可欠である。学生が主体的に自己学習を行えるように自己練習日を設定し、自己学習できる環境作りや質問対応、指導を行っている。
4. 質的研究についての講義・演習	2014年6月	済生会富田林病院にて、看護師を対象に質的研究について講義および演習を行った。講義では質的研究の基礎について説明し、演習では事例を用いて実際に分析を行ってもらい、結果を発表してもらい、解説を行った。
5. 成人慢性期看護の実習指導	2006年4月から2008年3月	大阪大学医学部附属病院にて、臨地実習指導者および臨地講師として成人慢性期看護の実習指導を行った。対象の理解に重点を置き、退院後の生活や社会資源の活用についても触れるようにした。
6. プリセプター講習会	2006年	大阪大学医学部附属病院のプリセプター講習会にて、看護師のプリセプターを対象に、成人の教育および教育評価について講習を行った。また、講習生にペアになってもらい、相手の長所と短所について述べてもらうという演習を取り入れた。それにより物事には二面性があり、短所も長所として見ることができるといふことに気づいてもらうことを狙いとした。
2 作成した教科書、教材		
1. 排泄の援助に関する講義資料	2017年7月	基礎看護技術演習Ⅱにおいて使用する排泄の援助に関する講義資料を作成した。本資料は、自立した排泄を目指すためにはどのように工夫すればよいか、おむつ関連トラブルについて、陰部洗浄の方法について理解できることを主な目的としたものである。イラストを用いてイメージしやすいよう工夫した。
2. CJC100 循環器編	2017年11月	国家試験対策としてCJC100というランチセミナーの循環器編を担当し、循環器の解剖生理を中心とした過去問題をピックアップし、その解説を作成した。
3. フィジカルアセスメント（循環器）に関する資料	2016年9月	基礎看護技術演習Ⅱ中のフィジカルアセスメント（循環器）で使用する講義資料を作成した。主に心音の聴診について、心臓の部位やメカニズム、音の違いやそれに関連する疾患が分かるよう工夫した。
4. 看護学概論における看護師国家試験対策のための資料	2016年4月～	看護学概論の授業において、前回行った授業範囲の中から看護師国家試験問題をピックアップして提示して資料を作成した。また、解説のパワーポイントを作成し、授業内容の復習を行うとともに、知識が深められるよう工夫した。
5. 排泄の援助に関する講義資料	2016年10月	基礎看護技術演習Ⅱにおいて使用する講義資料を作成した。自立した排泄をめざすことを前提に、おむつやパッドの選び方、装着方法、陰部洗浄の方法についてポイントが分かるよう工夫した。
6. 質的研究についての講義・演習資料	2014年6月	済生会富田林病院にて、看護師を対象に質的研究について講義および演習を行うために資料を作成した。講義資料は、質的研究の基礎について概要をまとめた。演習では実際に分析を行ってもらうため、事例作成と、分析過程がわかるよう解答例を作成した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪夕陽丘高校 模擬授業	2016年9月	大阪夕陽丘高校の生徒に対し、「からだの音を聞いてみよう」をテーマとした模擬授業に講師として参加した。触診、聴診を体験し、それらと看護へのつながりを伝える内容となっており、授業が円滑に進むよう努めた。
2. 武庫川女子大学サマースクール	2015年6月	武庫川女子大学サマースクールにて小学生を対象とし、手洗いの必要性と手洗いの方法に関する健康教育の実施

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
		案を検討した。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 介護支援専門員	2005年5月	
2. 看護師免許	1997年4月～現在	
3. 保健師免許	1997年4月～現在	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大阪大学医学部臨地講師	2008年10月10日～2009年3月31日	大阪大学医学部附属病院にて、循環器・腎臓内科の成人看護学実習の臨地講師として学生の実習の調整、教育を行った。
2. ACLSインストラクター	2007年	大阪大学医学部附属病院の院内で実施されているACLS講習会にて、月に1度、インストラクターとして参加し、BL S、ACLSの知識と技術の習得をサポートした。
4 その他		
1. 日本循環器看護学会誌 奨励論文賞 受賞	2014年10月	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1. 仕事をもつ慢性心不全患者がセルフモニタリングしつつ行う生活調整 (修士論文)	単	2011年3月	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻	仕事をもつ慢性心不全患者が、どのようなセルフモニタリングを行いながら生活調整をしているのかを明らかにすることを目的に研究を行った。6名の患者を対象に半構造化面接を行い、質的統合法 (KJ法) を用いて分析した。結果より、患者は、症状に応じた生活調整を行っている場合と、仕事に応じた生活調整を行っている場合があり、患者の症状や仕事が生生活にどの程度影響しているかについて理解し、支援する必要があることが明らかになった。
3 学術論文				
1. 日本における植え込み型除細動器治療選択の意思決定支援に関する文献検討 (査読付)	共	2015年12月	日本慢性看護学会誌, 9巻2号, P. 67-73	日本におけるICD治療選択の意思決定支援に関する文献検討を行い、そこから看護支援の示唆を得ることを目的に研究を行った。ICD治療選択の意思決定支援に関する文献検討を行い、意味内容の類似性に基づき質的に分類した結果、6つのカテゴリーが抽出された。本研究の結果より、術前における意思決定を支えとともに、術後の継続的支援が必要であることが明らかになった。また、終末期のICD停止に関する問題や、緩和ケアの導入に関しても検討していく必要があることが示唆された。 共著者名：上谷千夏、瀬戸奈津子、谷本真理子、高橋奈美、添田百合子、林優子、
2. ストーマ造設患者のレジリエンスの要素 (査読付)	共	2015年10月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌、19巻3号、P. 301-308	ストーマ患者が対処すべき困難を乗り越えてきたプロセスに機能する力であるレジリエンスの要素を明らかにすることを目的に、ストーマ患者13名を対象に半構成的面接を実施した。また、面接内容を Grotberg のレジリエンスの枠組みである周囲からの支援 (I have)、個人の内面の強さ (I am)、対処する力 (I can) の3つの側面を用いてその概念に含まれる要素を質的記述的に抽出した。レジリエンスをもつストーマ患者は、自身のもつ強さを自覚しながらも、ストーマケアを継続して支えてくれる家族や社会、医療者の存在を認識し、無理せず支援を求め精神的に安定した状態でストーマに関するセルフケアを確立していくという過程を経ることが示唆された。 共著者名：佐竹 陽子、新田 紀枝、石澤 美保子、前田 由紀、田中 寿江、高島 遊子、奥村 歳子、谷口千夏、石井 京子、藤原 千恵子
3. 一時的ストーマを造設した患者の配偶者の困難な経験 (査読付)	共	2015年10月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌、19巻3号、P. 293-300	本研究は、一時的ストーマ造設患者の配偶者の困難な経験を明らかにすることを目的に、一時的ストーマ造設患者の配偶者5名に半構成的面接を行い、質的記述的分析を行った。分析の結果、3つのカテゴリーが抽出された。看護職者は、これら3つの側面を合わせもつ者として、一時的ストーマ造設患者の配偶者を捉え、支援する必要があることが示唆された。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
4. 一時的ストーマ造設患者の配偶者のレジリエンス (査読付)	共	2014年9月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会誌、18巻3号、p. 305-312	共著者名：奥村歳子、新田紀枝、石澤美保子、田中寿江、佐竹陽子、前田由紀、高島遊子、谷口千夏、石井京子、藤原千恵子 一時的ストーマ患者の配偶者のレジリエンスを明らかにすることを目的に、一時的ストーマ患者の配偶者5名に半構成的面接を行い、Grotrbergのレジリエンスの3つの枠組み：個人の内面の強さ (I am)、周囲からの支援 (I have)、対処する力 (I can) を用いてカテゴリーの抽出を行った。本研究において、配偶者が患者のストーマケアに必要な応じて、主体的に参加することが配偶者のレジリエンスを高めることが示唆された。
5. 仕事をもつ慢性心不全患者が生活調整をするためのセルフモニタリング (査読付)	共	2013年2月	日本循環器看護学会誌、8巻2号、P. 17-25	共著者名：新田 紀枝、石澤 美保子、宮野 遊子、佐竹 陽子、前田 由紀、田中 寿江、奥村 歳子、上谷 千夏、石井 京子、藤原 千恵子 仕事をもつ慢性心不全患者が生活調整をするために、退院後の療養生活を送る中で、どのようなセルフモニタリングを行っているかを明らかにすることを目的に研究を行った。6名の患者を対象に半構造化面接を行い、質的統合法 (KJ法) を用いて分析した。結果より、自覚症状と医師の評価を頼りにするセルフモニタリングと仕事や健康管理の優先度に応じたセルフモニタリングが明らかになった。 共著者名：上谷千夏、瀬戸奈津子、清水安子
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. A case study regarding home nursing support provided by visiting nurses to support the lives of people with chronic heart failure (訪問看護師による慢性心不全をもつ人の生活を支える在宅看護支援に関する事例検討)	共	2015年2月	18th East Asian Forum of Nursing Scholars	訪問看護師が、慢性心不全をもつ人の体調や生活の状況をどのようにとらえ、支援しているのかを明らかにし、看護支援の示唆を得ることを目的として研究を行った。訪問看護師は、医療と生活の両方の視点から心不全悪化の状況をとらえ、医療を受けながらの生活が継続できるよう支援していることが明らかになった。これらの医療と生活の視点を踏まえ、慢性心不全患者の生活を支える在宅看護支援を行う必要性が示唆された。 Chinatsu Uetani, Natsuko Seto, Ayako Okada, Chi sono Ohara, Yasuko Shimizu
2. オストメイトの家族のレジリエンス (その2) -レジリエンスの影響する要因-	共	2014年8月	第21回日本家族看護学会学術集会	地域で生活するオストメイト家族の、困難を乗り越える過程に機能する力であるレジリエンスに影響する要因を明らかにすることを目的として研究を行った。オストメイト家族のレジリエンスを高める要因として、「排泄物に影響する食事や飲み物の知識と対応をオストメイトが毎日一人で行う場合」や「家族が配偶者である場合」が影響していた。 前田由紀、佐竹陽子、新田紀枝、田中寿江、石澤美保子、宮野遊子、奥村歳子、上谷千夏、石井京子、藤原千恵子
3. オストメイト家族のレジリエンス (その1) -レジリエンスの因子構造-	共	2014年8月	第21回日本家族看護学会学術集会	地域で生活するオストメイトのストーマ増設によって家族が経験する困難を乗り越えるプロセスに機能する力であるレジリエンスの因子構造を明らかにすることを目的として研究を行った。オストメイト家族のレジリエンスの因子構造について、「問題解決力」、「支援認知力」、「全身的思考力」の3因子が抽出され、信頼性と妥当性が確認された。 佐竹陽子、前田由紀、新田紀枝、田中寿江、宮野遊子、奥村歳子、上谷千夏、石澤美保子、石井京子、藤原千恵子
4. 日本におけるICD (Implantable Cardioverter Defibrillator) 植込みの意思決定支援に関する文献検討	共	2014年7月	第8回日本慢性看護学会学術集会	本研究は、わが国におけるICD (Implantable Cardioverter Defibrillator ; ICD) 植込みの意思決定支援に関する文献検討を行い、質的帰納的に分析した。ICDを装着した患者は、致死性不整脈による不安からは解放されるが、新たにICDの作動の恐怖に脅かされ、不安障害に陥りやすいため、術前のみならず術後の継続した看護が重要であることが示唆された。また、終末期も含めた意思決定支援に関する看護支援が必要であることが明らかになった。 上谷千夏、瀬戸奈津子、谷本真理子、高橋奈美、添田百合子、林優子
5. オストメイトのレジリエンス (その2) -レジリエンスに影響する要因-	共	2014年5月	第23回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会	地域で生活するオストメイトの、困難を乗り越える過程に機能する力であるレジリエンスの因子構造を明らかにすることを目的として研究を行った。オストメイト164人の調査結果より、全31項目において「支援認知力」、「問題解決力」、「前進的思考力」、「医療者支援認知力」の4因子から構成される因子構造が確認できた。

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
6. オストメイトのレジリエンス（その1）－レジリエンスの因子構造－	共	2014年5月	第23回日本創傷・オストミー・失禁管理学会学術集会	田中寿江、宮野遊子、新田紀枝、奥村歳子、上谷千夏、佐竹陽子、前田由紀、石澤美保子、石井京子、藤原千恵子 地域で生活するオストメイトの、困難を乗り越える過程に機能する力であるレジリエンスの因子構造を明らかにすることを目的として研究を行った。オストメイト164人の調査結果より、全31項目において「支援認知力」、「問題解決力」、「前進的思考力」、「医療者支援認知力」の4因子から構成される因子構造が確認できた。 宮野遊子、田中寿江、新田紀枝、上谷千夏、奥村歳子、前田由紀、佐竹陽子、石澤美保子、石井京子、藤原千恵子
7. Literature review regarding decision-making support for implantation of implantable cardioverter defibrillators in Japan（日本におけるICD植込みの意思決定支援に関する文献検討）	共	2014年2月	17th East Asian Forum of Nursing Scholars	本研究は、日本におけるICD植込みの意思決定支援に関する文献検討を行い、そこから看護支援の示唆を得ることを目的とした。ICDを装着した患者は、致死性不整脈による不安からは解放されるが、新たにICDの作動の恐怖に脅かされ、不安障害に陥りやすいため、術前のみならず、退院後の継続した支援体制の構築が重要であることが示唆された。 Chinatsu Uetani, Natsuko Seto
8. 慢性心不全患者の生活を支える在宅看護支援指針の開発に向けた症例検討	共	2014年10月	第11回日本循環器看護学会学術集会	慢性心不全患者の生活を支えるための在宅看護支援指針の開発に向け、訪問看護師がどのように心不全悪化の兆候をとらえ、療養支援を行っているのかを明らかにすることを目的として研究を行った。訪問看護師は、慢性心不全患者の状態を継続して観察しながら医療と生活の両側面からアセスメントしており、対象が必要な医療を受けながら生活が継続できるよう支援していることが明らかになった。これらの視点を踏まえ、慢性心不全患者の生活を支える在宅看護支援指針の開発にむけて検討していく必要があることが示唆された。 上谷千夏、瀬戸奈津子、岡田彩子、大原千園、清水安子
9. The present condition of registered instructor of cardiac rehabilitation and role of nurses in Japan（日本における心臓リハビリテーション指導士の現状と看護の役割）	共	2013年2月	16th East Asian Forum of Nursing Scholars	我が国における心臓リハビリテーション指導士は、看護師を含む多職種から構成されている。心臓リハビリテーションは、包括的に行う必要があり、医療専門職間の連携やチーム医療が重要である。本研究では、心臓リハビリテーションにおける実施状況や連携の状況について調査し、看護師は、急性期と維持期における多職種の連携を調整する役割があることが示唆された。 Chinatsu Uetani, Takahiro Deguchi, Natsuko Seto, Yasuko Shimizu
10. 慢性心不全患者のセルフモニタリングの看護支援指針作成のための文献検討	共	2013年12月	第33回日本看護科学学会学術集会	慢性心不全患者は心不全増悪の症状や徴候をとらえにくいことから、日常生活における心不全管理が難しく、ケアの遅れにつながっている。そのため、患者のセルフモニタリングを促進する援助が重要である。本研究では、慢性心不全患者のセルフモニタリングに焦点を当て、国内外の看護研究を概観し、その支援について示唆を得た。 上谷千夏、瀬戸奈津子、清水安子
11. Concept analysis of self-monitoring for person with heart failure（慢性心不全患者のためのセルフモニタリングの概念分析）	共	2012年2月	15th East Asian Forum of Nursing Scholars	慢性心不全患者が早期に心不全の悪化の症状を認識することは、難しいことが報告されている。セルフモニタリングは症状や徴候を捉えるために重要であるが、その概念の使われ方は様々であり、統一されていない。本研究では、慢性心不全患者のためのセルフモニタリングの概念を明らかにした。 Chinatsu Uetani, Natsuko Seto, Yasuko Shimizu
12. Self-monitoring of lifestyle adjustment by a working person with heart failure（仕事をもつ慢性心不全患者が生活調整するためのセルフモニタリング）	共	2011年2月	14th East Asian Forum of Nursing Scholars	慢性心不全患者が、仕事をもちながら生活調整をする中で、どのようなセルフモニタリングを行っているのかについて、半構造化面接を行い、質的に分析した。患者は、退院後の療養生活を送る中で、医療者の支援を受けることによって、体調の回復を実感し、そのことがセルフモニタリングの継続につながっていた。医療者の定期的な支援が重要であることが示唆された。 Chinatsu Uetani, Natsuko Seto, Yasuko Shimizu
13. 慢性心不全患者C氏がセルフモニタリングしつつ行う生活調整	共	2011年12月	第31回日本看護科学学会学術集会	我が国における心臓リハビリテーション指導士は、看護師を含む多職種から構成されている。心臓リハビリテーションは、包括的に行う必要があり、医療専門職間の連携やチーム医療が重要である。本研究では、心臓リハビリテーションにおける実施状況や連携の状況について調査し、看護師は、急性期と維持期における多職種の連携を調整する役割があることが示唆された。 共同発表者：上谷千夏、瀬戸奈津子、清水安子
14. 仕事をもつ慢性心不全患者が生活	共	2011年11月	第8回日本循環器看護学	慢性心不全をもつ6名の患者を対象に、退院後の療養

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
調整するためのセルフモニタリング			会学術集会	生活を送る中で、仕事をもちながら生活調整をするためにどのようなセルフモニタリングを行っているかについて質的研究を行い、その結果について報告した。患者は、セルフモニタリングを行うことにより、病状の回復の実感につながるが示唆されたが、健康管理に向き合う負担感や不安が存在することも明らかとなり、精神面にも配慮した支援が必要であることが示された。 共同発表者：上谷千夏、瀬戸奈津子、清水安子
15. わが国の心臓リハビリテーションの現状について	共	2011年	第17回 日本心臓リハビリテーション学会学術集会	わが国の心臓リハビリテーションの現状を明らかにするために、心臓リハビリテーション指導士を対象に郵送法質問紙調査を行い、職種ごとに、時期的区分における心臓リハビリテーション実践項目に対する自己評価と重要度について分析を行った。医師は全体的に得点が高く、看護師は冠危険因子は正、教育およびカウンセリングで得点が高く、運動処方に関する得点が低かった。 共同発表者：瀬戸奈津子、出口貴大、上谷千夏、福録恵子、清水安子、越智恭子、鷺田幸一、岡永幸平、佐藤真治
16. 慢性心不全をもつA氏が仕事をもちながら生活調整するためのセルフモニタリング	共	2010年11月	第7回日本循環器看護学会学術集会	慢性心不全をもつA氏が、仕事をもちながら生活調整する中で、どのようなセルフモニタリングを行っているのかについて、半構造化面接を行い、質的に分析した。A氏は、心不全以外の合併症ももっており、過去の経験を頼りに、仕事による体への負担の程度や医療機関を受診する必要性を判断していた。知識の提供とともに、複雑な状況の中における体調の判断に支援が必要であることが示唆された。 上谷千夏、瀬戸奈津子、清水安子
17. コメディカルとの連携により在宅終末期医療を実現し得た一症例	共	2009年3月	第73回日本循環器学会学術集会	心アミロイドーシスと診断され、身体症状が悪化し、精神的に混乱を来した患者が在宅療養に移行できた症例について検討した。循環器領域において本人が余命を知った上で、在宅でターミナル期を過ごすケースは少ないが、福祉用具、往診医・訪問看護の調整、緊急時の受け入れ病院の調整などを行い、在宅療養が可能となり終末期を自宅で過ごすことができた事例について報告した。 上谷千夏、福森優司、表八洋子
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. パネルディスカッション2 循環器疾患患者のセルフケアの確立を目指した患者教育を考える「慢性心不全の悪化を防止するための療養行動を支援する外来看護について考える」	単	2016年10月	第13回日本循環器看護学会学術集会	循環器疾患患者のセルフケアの確立を目指した患者教育を考えるためのパネルディスカッションにパネラーとして参加した。慢性心不全患者へのセルフモニタリングに関するインタビュー調査より事例を紹介し、慢性心不全患者の療養行動を支援するための外来看護について発表し、討論を行った。
2. 基礎と臨床がつながる 疾患別看護過程 9. 慢性心不全	単	2015年9月	Gakken Nursing Canvas Book 4, p.247-273	慢性心不全患者の事例を通し、疾患についての解説を加えながら、実際にどのように看護過程を展開するのかについて解説した。 執筆：上谷千夏，総監修：瀬戸奈津子，監修：畑中あかね
3. 特集【病態を理解！ケアを実践！他疾患を合併した循環器疾患患者さんのケア】1. 糖尿病	共	2014年1月	HEART V ol.4, No.1, p.18-25	他疾患を合併した循環器疾患の病態に関する知識やケアの技術について、わかりやすく解説する特集において、糖尿病について解説した。 瀬戸奈津子、上谷千夏
4. 【使いこなし！疾患別看護過程】慢性心不全心的ストレスにより増悪をきたした事例	単	2013年12月	ナーシング・キャンパス, Vol.1, No.9, p.57-82	慢性心不全患者の事例を通し、疾患についての解説を加えながら、実際にどのように看護過程を展開するのかについて解説した。 執筆：上谷千夏，総監修：瀬戸奈津子，監修：畑中あかね
5. The Japan Centre for Evidence Based Practice (JCEBP) 翻訳ボランティア	共	2012年12月	The Japan Centre for Evidence Based Practice (Osaka University, Japan) : An Affiliate Center of the Joanna Briggs Institute	以下の内容に関する20編のエビデンスサマリーの翻訳作業を行った。 静脈血栓症予防、妊娠管理（親への教育）、閉塞性睡眠時無呼吸/低呼吸症候群に関する診断と管理、心筋梗塞後の予防、心的外傷後ストレス障害の管理、尿閉における膀胱訓練、尿道カテーテルにおける尿路感染予防、精神科の暴力に対する管理、子宮筋腫の管理、帝王切開後の経膈分娩、妊娠検査、拒食症の管理、双極性障害の管理、うつの評価と治療、パニック障害と広場恐怖症の治療、医師の継続指示、創傷洗浄の有効性、膝損傷（軟部組織）の診断と管理、肩損傷（軟部組織）の診断と管理
6. 次はあなたがリポーター！みんな	単	2011年9月	ハートナーシング, vol	2011年3月に心臓リハビリテーションワークショップ

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
の学会見聞録「ホノルル心臓リハビリテーションワークショップ」			.24, no. 9, p. 74-76	がハワイ州ホノルルで開催された。米国の医療事情やクオリティコントロールについて、慢性期のレジスタンストレーニングや慢性疾患患者のセルフマネジメントについて報告した。
7. パネルディスカッション 慢性心不全に対する心臓リハビリテーション	単	2011年12月	第1回The Japan Centre for Evidence Based Practice (JCEBP) シンポジウム	慢性心不全に対する心臓リハビリテーションの適応や効果のエビデンス、心臓リハビリテーションの実際、入院から退院後の療養生活にいかにつなげていくか等、今後の課題について講演した。また、その後、臨床でいかにエビデンスを構築していくかについてパネルディスカッションを行った。
8. 【おしえて!フットケアははじめの一步】 フットケアQ&A(Q&A/特集)	共	2010年2月	ハートナーシング, vol. 23, no. 2, p. 186-194	循環器疾患患者は末梢の血流障害を少なからず有しているため、フットケアが必要である。フットケアは足全体と靴の観察、末梢神経障害や末梢動脈疾患による影響や足病変と複雑に絡む日常生活のアセスメントにより足病変の原因を考え、患者に必要な自己管理方法を指導する。実際にどのように足の観察、アセスメント、ケアを行っているのかについて解説した。 共著者名：畑中あかね、上谷千夏、瀬戸奈津子
9. 【おしえて!フットケアははじめの一步】 フットケアの実際(解説/特集)	共	2010年2月	ハートナーシング, vol. 23, no. 2, p. 195-204	循環器疾患患者のフットケアで重要なことは、患者がセルフケアできるように働きかけることである。回復期・維持期には患者がフットケアの必要性を認識し、日常生活にその患者に適したフットケアを上手に取り入れることが重要である。実際の事例を用いてフットケアの介入方法について解説した。 共著者名：畑中あかね、上谷千夏、瀬戸奈津子
10. 次はあなたがリポーター! みんなの学会見聞録「第15回日本心臓リハビリテーション学会学術集会」	単	2009年11月	ハートナーシング, vol. 24, no. 9, p. 85-88	2009年7月に東京で第15回日本心臓リハビリテーション学会学術集会が開催された。ハワイの多職種融和型医療モデルからカンファレンスのあり方について学ぶというワークショップや、心臓リハビリテーション開始時の評価法の講演について報告した。
11. パネルディスカッション 医療福祉ネットワークとの連携「患者QOLの向上をはかる病院・在宅の担い手-病棟看護師より-」	単	2008年10月	大阪大学医学部附属病院	心アミロイドーシスと診断され、身体症状が悪化し、精神的に混乱を来した患者が在宅療養に移行できた症例について検討した。病状の受容・意思決定に対する援助、家族関係の調整、院内連携、地域連携について報告し、報告後、パネルディスカッションを行った。
12. フィンランド・オウル大学看護学科と大阪大学医学部看護学専攻との学術交流セミナー報告	共		大阪大学看護学雑誌, vol. 19, no. 1, p. 51-56	日本学生支援機構の平成24年度留学生交流支援制度を受け、2012年9月に、フィンランド・オウル大学看護学科と大阪大学医学部保健学専攻の学部間協定による学術交流が行われ、高度な医療を提供するオウル大学病院と包括的な一時医療を提供するヘルスセンターを見学した。フィンランドの保険制度や、病院やヘルスセンターでの看護実践について報告した。 共著者名：大村佳代子、上谷千夏、矢山壮、土屋さやか、山川みやえ、瀬戸奈津子、牧本清子
6. 研究費の取得状況				
1. 慢性心不全患者のセルフモニタリングを促進するための外来看護支援指針の開発	単	2016年4月～	日本学術振興会	平成28年度科学研究費（研究活動スタート支援）

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2017年4月～2018年3月	日本看護研究学会 第31回近畿・北陸地方学会学術集会 実行委員
2. 2016年10月～2018年	日本循環器看護学会 倫理委員会委員
3. 2012年9月	第17回 日本糖尿病教育・看護学科学術集会 実行委員
4. 2012年3月	第3回 看護質的統合法（K J 法）研究集会 実行委員
5. 2012年3月	日本看護研究学会 第25回 近畿・北陸地方学会学術集会 実行委員